
魔法少女リリカルなのは strikers 超闘士を操る男

レイブン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは s t r i k e r s 超闘士を操る男

【Nコード】

N 6 2 4 6 T

【作者名】

レイブン

【あらすじ】

DC戦争やL5戦役、インスペクター事件が終わって世の中は一時の休息を得ていたときL5戦役から超闘士ことグルンガストを操る青年シンク・ハーミッツとはある仕事で隕石の破壊をしに単独でその隕石に向う。それが物語の始まり・・・作者は初心者です。またOGシリーズをもはやうろ覚えです。 w i k i 片手にがんばります。あんまりへたっぴでも石を投げないでくださいお願いします。

第一話（前書き）

外の説明にもあるように作者は初心者でこれが処女作です。

OG側の設定はインスペクター事件終了後

リリカルなのは側はstriker編のアグスタ終了後です。

またリリカル側はドラマCD1はやってません。

ちなみに外の説明でもあるように作者はいまいちOGの話をおぼれて
います。

wiki見ながらです・・・ハイ・・・サーセン勘弁してください
やり直すのが面倒なだけです。

温かい目で読んでくれるとうれしいです

それでは、魔法少女リリカルなのはstriker 『超闘士を
操る男』 始まります

第一話

「つたくよく・・・なんだよ、隕石ぐらいタスクにでもやらせろよ」

この男の名はシンク・ハーミッツ

年齢は21で地球連邦軍汎用戦闘母艦ヒリュウ改所属で階級は少尉
使用機体はグルンガスト

コールサインはオクト6

濃紺の髪に白いメッシュが入った短髪の髪に青い瞳の青年である。

ちなみにタスクとは彼の親友で同じヒリュウ改所属のメンバーである。

グルンガスト

超闘士の異名を持つ。『OG』シリーズでは同系列機の名称に合わせて「壱式」と呼ばれることがある。

「スーパードロイド」の名に恥じない機体の開発を望む

ジョナサン、ロバートウイングガスト両博士の意向により、

大型戦闘機形態および重戦車形態ガストランダーへの変形機能を有する。

戦闘能力や汎用性は高いが、扱いが難しく整備性にも問題を残している機体である。

ちなみにこの機体はL5戦役中に試験的に配備されたまたま乗る機体が無く困っていたシンクに

渡された機体であるのだが・・・シンクの居るヒリュウ改のチーム
オクト小隊のリーダーのカチーナに機体を交代しろと必要以上に迫られている。

ちなみにシンクの使うグルンガストは通常の「壱式」には無い性能

が追加されている。
研究段階でいくらか問題はあるが実質的な「四式」である。

「あゝあ・・・休暇もらって地球に降りれるかと思ったらこの仕打ち・・・

人使い荒いぜ。まったくよゝ」

現在はウイングガストで宇宙空間に出現した直径二キロの小型隕石の軌道をずらすまたは破壊ということでの場に向かっていた。

宇宙空間にあるいくつもの小惑星や衛星をぬって進んでいくとそれはあった。

「ああ、アレが報告にあった隕石か」

近くでグルンガストに変形して近づく

「うーん・・・やっぱこれってなんかおかしいな・・・そういえばタスクのやつが言ってたな・・・

L5戦役が終わってあんまり立たない時にガンドロぶっ壊すほどのやつが隕石に化けた機動兵器とたたかったって・・・まさかなあゝ」

突如、頭を叩かれたかのような頭痛が起きる。

その瞬間に隕石の外壁が崩れ中から大きなエイのようなナニカが出てきた

「・・・地球外生命体？それとも機動兵器か？」

その瞬間そのナニカの背中からいくつもものうろこのようなものが飛び出したてこちらに向かってきたのでそれをよける

「チッ！やっぱ機動兵器か・・・だが！」

連続して飛んでくるうろこをよけながら背部のウィングから計都羅？剣を取り出し振りおろす。

しかし敵はそれをすり抜けるかのように避けてグルンガストに張り付こうとする。

伸ばされた二本の触手をグルンガストの両手で受け止める

「ぐっ・・・ブーストナックル！」

肘から下を飛ばし敵を離すとすかさず胸の装甲が開きそこにエネルギーがたまる

「ファイナルビーム！」

これで決まったとシンクは確信したがそれが仇になった。敵はそれをひらりと避けるとブーストナックルから手を離し接近してくる

「くそっ・・・Gテリトリー反転！」

しかし敵が展開していた武装によってグルンガストの胸の部分を貫通する

「ぐっ・・・だがこれで終わりだ！」

かぶっていたヘルメットが外れて血だらけの顔が見える。
コントロールルームへの貫通は免れたがすでにグルンガストはぼろぼろだった

「はぁ・・・はぁ・・・超闘士なめんなよ！！計都羅？剣！」

避けられたブーストナックルが手に再びついたことを確認しながら改めて剣を振りかぶる。敵はGテリトリーが発動しているため動くことが出来ない

「計都羅？剣・暗剣殺！！」

敵を立てに切り裂き後ろに回りこみ今度は水平に切り裂き敵を破壊した

「はぁ・・・はぁ・・・おっ・・・終わったのか？」

意識が朦朧とする中、目の前に漂う本の小さな赤い宝石をグルンガストの手で壊れないように掴み取る

「戦利品・・・ってな・・・というか・・・渡す相手なんていねえや・・・ははっ・・・」

そして救援信号を受けたタスクとレオナが到着した時には

シンクもグルンガストも無く彼は行方不明になった

第一話（後書き）

かっとしてやった今は後悔していない

反省

内容が薄い

戦闘描写が薄い

次回からはがんばります

それでは次回もお楽しみに

第二話（前書き）

本作ではリリカル側に転生者が出てきます。能力は某月型の自称正義の味方です。

ちなみに全員が惚れているわけではなくフェイトと付き合っています。

ロボット関連の知識はまったくありません。あと、オリジナル機体が出てきます

それでは本編スタート

石は投げないでくださいお願いします

第二話

おすつ俺はエミヤ シロウ。転生者だ。・・・といってもそれはもう19年も前の話。

現在は三等空佐という地位で六課に所属している。

現在ストライカーズ編に突入してアグスタだったのだが、俺は自分の立場から

いろいろな仕事が入るため、その別の仕事でそれにいけず
ティアナのミスショットを止められなかった。

それを悔やみながらなのはをどうやって止めようかと考えていた時に

「エミヤ シロウ三等空佐。今すぐ部隊長室に来るように」

おっとはやてが呼んでるな、すぐに行かないと怒るだろうし・・・
行くか

「次元振動？」

「そや、ここからあんまりはなれていない山奥で結構大きい次元振動を観測

更にロストログアの反応が出たんや、今すぐフェイトちゃんと一緒に言ってくれへんか？」

こんな時期に次元振動なんて無かったはず・・・ということは俺と同じ転生者か・・・それともこれが外史の影響なのか・・・

「シロウくん？」

「ん・・・あつすまん。了解したすぐに出発する」

俺が現場に着いたときに見たものはその場に広範囲になぎ倒された木々と青を基調とした巨大なロボットだった。

「シッシロウ・・・何アレ？」

「・・・わからん・・・とりあえずそばまで行こう」

近くに寄るとそのロボットの顔のそばに倒れているパイロットスーツを着た黒っぽい髪の青年
血だらけで息も荒く顔色もあまりよくない。

「早くつれて帰ろう」

「ああ、そうだな」

その時、巨大なロボットが粒子になり彼の左腕の時計のようなものの中に入っていった

「ますます・・・謎だな・・・」

だが、シロウは確信した。彼は転生者ではない。
転生者ならこんな傷だらけで出てはこないだろう。

その時はまだ気づかなかったがそのロボットの手には彼らの探していたものが握られていた

「ぐっ・・・あれ？俺生きてる？・・・」

目覚めるとそこは白い天上だった。ツンと来る薬品のおいと白い天上

それはヒリユウ改とイカロス基地の医務室のどちらでもなかった

「あっ・・・よかった。起きたんですね。二日も目覚めないからもう駄目かと思いましたよ。

はやてちゃん。保護した男の人が起きましたよ」

二日間・・・あのよくわからん化け物との戦いから生きていただけよかったか。

その時扉が開き三人の少女に一人の少年が入ってきた

「いやあよかったわ、ほんまシロウ君が血だらけのあんたを抱えてきた時は

ド肝抜かれたわ・・・そいで持って自己紹介せなあかな。

わたしは時空管理局古代遺物管理部機動六課部隊長の八神はやて二等陸佐です」

「同じく高町なのは一等空尉です」

「フェイト・T・ハラOWN執務官です」

「エミヤ シロウ三等陸佐だ」

「これはご丁寧に……俺は地球連邦軍汎用戦闘母艦ヒリュウ改所属。」

シンク・ハーミッツ少尉です」

ベットに身を起こしながら敬礼をすると、向こうも敬礼をする

「ところで……時空管理局とは一体？」

「こっちは地球連邦軍がわからへんやけど……とりあえず『ぐう』えっ？」

はやてがシンクに質問しようとしたところで何かのなる音がする。音の主は顔を真っ赤にしていた

「すみません／＼／＼……かれこれ三日何も食べていないのでおなかが減ってしまって……」

「アハハッ、なかなかかわええところあるんやな。それじゃとりあえずご飯食べにいこか」

シンクはベットから立ち上がり枕元になぜかおいてある普段自分が着ている制服に着替える。

その時、手にいつも巻きつけているものが無いことに気づいた

「あの、俺の腕についてたやつってどうしましたか？」

「ああ、あれな・・・シャーリーが持ってたで、異世界の技術に興味があるいうて」

「もってっちゃったんですか？・・・アレを持てかれると面倒なんだよな・・・」

はあ、今度はマオ社に殺されそうだな・・・俺・・・

はやてたちは驚いた。

それはシンクの食欲である。

機動六課にはスバルとエリオという大食が居るがそれとは比べ物にならない

軽く20人前ぐらいは食べていた

「ガツガツっ！それで、デバイスってなんなんですか？」

「デバイスって言うのはね・・・かくかくしかじか」

なのはによる説明は多いので飛ばす

いやあゝ便利だねかくかくしかじかby作者

「へえ、魔法ねえ・・・しんじらんねえけど、まあ信じるしかないんだろうな。」

「んじゃ今度はこっちが説明するか」

地球連邦の説明（DC戦争やL5戦役、インスペクター事件は飛ばして）した

「スーパーロボットか・・・しんじられないが実物を見ちまったから信じるしかないな」

「んなこといっても、証明するにもグルンガストはここには無いし・・・」

得盛ラーメンを完食すると、はやてたちのところに一人の眼鏡の少女が入ってきた

「あの、これの持ち主ってあなたですか？」

「あつ、グルンガストのコントロールキー。返してください」

「いっいえ、返すのはかまいませんけど、これデバイスみたいなんですよ」

コントロールキーを返してもらうとキーが光だし

『やっとマスターの元に戻ることが出来ました』

「うおっ」

驚いて机の上にキーを落とす。

「なっ・・・喋った・・・キーにAIなんて搭載していないはず

なのに」

『まったくずっと一緒に戦ってきた機体を投げるなんてひどいマスターですね』

「おっ・・・お前・・・グルンガストか!？」

あまりのことに声が裏返る

「まあ先ほどの彼女の言葉は少し間違っています。私はデバイスではなく

ただの収納庫です。マスターにはリンカーコアが無い時点で見えますが」

そう彼は簡易検査で魔力が無いことが証明された。

『一ついえることは私はデバイスに限りなく近く

とてつもなく遠いものです。とりあえずこの先のマスターとの会話は

連邦軍の極秘内容になるので出来ればここではない場所につれてってください』

「そやな・・・とりあえず休憩室があるからそこへ行ってもらおか」

大量におかれた食器を片付けるところから離れた場所にある休憩室にきた。

4人と別れて一人で部屋の中に入る。

まず、腰から特殊な機材をだしそのスイッチを入れる。

しばらく部屋中にかざして確認する

「まあ見た感じ、盗聴器等は無いな。そんで話って何だ？」

『はい、私の中には現在修復中のグルンガストのほかに別の機体が入っているんです』

「別の機体？っていうかお前の中にグルンガスト・・・どうやって入ってるんだよ？」

『まあ、気にしたら負けです。それで中に入っているのがどうやらアーマーのような機体なんです。

名前はゲシュペンスト・アームドというらしいです』

機械を通して映し出された機体のデータを閲覧すると普通ではありえない高性能機のデータが映し出された

「おいおい・・・何でこんな機体が入ってるんだ？まあいいかとりあえず話は終わりだし

出るか」

そして部屋の外へ行くと誰もいなく

アラートだけがなっていた（部屋は全て防音のため聞こえなかった）

「くそっ、どうする・・・とりあえず外へ行こう」

走って外に出るとヘリコプターがどこかへと飛んでいった

『追いかけますか？』

「ああ、もちろんな」

キーが光り全身を包み込むそして姿が変わり
フルスキン
黒を基調とした全身装甲の姿になった

「あー・・・しっくりこないな・・・まあしょうがないか。
念動フィールド展開。

プラズマ・リアクター出力全開！」

黒い亡霊の名を持つ機体がへりを追いかけて出発した

第二話（後書き）

この物語、もう少し進んだら

グルンガストを出して戦うことの出来る敵を出そうと考えています。
あとOG組もそれなりに出すつもりです。

現在考えているのは、方向音痴の男は出す予定です

S R XかA T Xのどちらかは出したいです

それでは次回もお楽しみに

機体データ&キャラ紹介

キャラ紹介

シンク・ハーミッツ

21歳

地球連邦軍汎用戦闘母艦ヒリュウ改所属

少尉

185センチ 68キロ

念動力者

顔は上の下、髪は零児の髪の黒いところを少し青っぽくした感じ

士官学校卒業後パイロット養成コースに入りパイロットになる。

主席卒業で与えられた機体はゲシュペンストMK-?タイプSで元ATXチーム所属

で現在はオクト小隊所属。

DC戦争、L5戦役で数々の功績を挙げる。

しかしL5戦役中に自分の機体を破壊され困っている時にマオ社の新型グルンガストを渡された

よく食べるといよりもとんでもなく食べる（エリオやスバルなど目じゃないぐらい）

機体スペックデータ

グルンガスト四式

形式番 S R G - 0 1 - 4

全高 4 8 . 0 m

重量 3 5 6 . 2 t

装甲材 V G 合金

動力源 プラズマ・リアクター

武装 オメガレーザー

ブレイククロス

ブーストナックル

ファイナルビーム / グルンガストビーム

計都羅? 剣

計都瞬獄剣

G・サークルブラスター (MAP兵器)

防御装 念動フィールド

ビームコート

M M I 脳波制御装置

音声入力式武器選択装置

T - L I N K システム

グラビコン・システム

乗員人数 1人

搭乗者 シンク・ハーミッツ

グルンガスト壺式をベースにして式式のT-LINKとガンドロにつまれているグラビコンシステムを

積み込んでいる。また、シンクの突撃癖のためビームコートが装備されている。

頭は龍型でカラーリングは青。

使おうと思えば計都羅？剣、計都瞬獄剣を同時に使うことが出来る扱いが非常に難しくシンクも最初はうまく操ることが出来なかったが今では手足のように扱える

ゲシュペンスト・アームド

全高 3 m

形式番 無し

重量 10 t

動力源 新型プラズマ・リアクター

武装 プラズマ・バックラー

スプリットミサイル

メガ・ビームライフル
M13ショットガン
M950マシンガン
Hiビームカッター
F2Wキャノン
T-LINKリッパ
プラズマステーク
グラン・プラズマカッター
グラン・スラッシュリッパ
プラズマサイズ
ニュートロン・ブラスタ

防御装備 ビームコート

乗員人数 1人

搭乗者 シンク・ハーミッツ

グルンガストの機動キーの中になぜか入っていた武装アーマー。
カラーリングは初期ゲシュペンストと同じ黒。
思い切り質量兵器だがごり押しで通してもらった
ゲシュペンストMK-?改とゲシュペンスト・ファントムを合わせ
たような武装。

ビーム系は魔法の力であっても反射できる優れもの

機体データ&キャラ紹介（後書き）

やっぱり出すならアインストかな？

ムゲフロの容量で、海の艦長が異世界から持って帰ってきてしまった系で・・・まあ、戯言ですね。はい

第三話（前書き）

ちよつとぐだぐだかも・・・

いやちよつとじゃなくてだいぶかも・・・

第三話

その時の機動六課の作戦室

「謎の機動兵器がフォワード陣に接近しています」

「なんやって!？」

モニターに映し出された画像には背中に柄だけの剣を指し
ジェット噴射で飛ぶ黒い機体だった。

「あんま信じたくないんやけど・・・あれシンク君とちゃうか？」

「・・・そうですね。生体反応はシンクさんのもののようです」

このときはやてはわかった。この男は命令などをまったく気かずに
自分の道を進む男だとわかったのだが
帰ってきたら一発殴ろうと考えたのであった。

旧市街地

「くっ・・・こんなに数が多いなんて・・・」

「やあ! この!」

フォワード陣は思いのほか多く現れたガジェットに苦戦している時
数対のガジェットがアンチマギングフィールドAMFを発生させ

魔力もねることもまともに出来なくなってしまう。

しかもガジェットたちは普通ではないぐらいに自己判断をしながら攻撃をしている

そのビーム攻撃はスバルとティアナに発射された

「（もう駄目だ・・・）」

二人が目をつぶって攻撃が当たったと確信したがいつまでたっても痛みは来なかった。

そして前を見ると黒い巨大な何かが立ちふさがっていた

「まったく・・・武器も持っていない少女を狙うとはな・・・

その体・・・打ち抜かせてもらおう！行くぞゲシュペンスト」

そんな声が聞こえたかと思うとガジェットを10体左手一振りで破壊した

「すごいなこのプラズマカッターとか言う武装は・・・

基本スペックだけならノーマルサイズのゲシュペンストとまともにやり合えるじゃねえか」

『普通なら初搭乗の機体には振り回されるものなんですけどね。

さすがはマスターです』

「いや、これほとんど自動にしてるけど・・・やっぱマニュアルに切り替えてくれ」

『ふふふっ、正直ですね。ではマニュアルに切り替えます』

目の前の画面にマニャアルモードと出たのを

背中から抜いたグラン・プラズマカッターを片手に持って

敵をばっさばっさと切り捨てていく

『他の武装も使ってください。基本的な武装はMK-7改の武装ですが

先ほどのグランシリーズの武装とニュートロン・ブラスターがついています』

背中にプラズマカッターを戻し、腰からM13ショットガンを抜き発砲。

大型のガジェット三型を打ち抜く

「たいしたことは無いが数が多い。この子達を守りながらはさすがにつらいぞ」

『一気に叩くしかありませんね。ここはグルンガスト「アホか！こんなところで出せるか！」ですね』

まったくこのAIはとか思いながらスーテクで敵を破壊する

「譲ちゃんたち逃げな。ンなコスプレしてる暇があったらがんばって生き残りやがれ」

「コスプレって……ていうかそれどう見ても質量兵器じゃないですか」

ティアナたちを見たまま後ろのガジェットを裏拳一発で叩き割る。それが最後だったらしく反応は全て無くなった

「ほとんど中に無理やりPTの構造を取り込んだようなやつだな。アーマーだが0.3秒反応が遅い。修正できるか？」

『マスター・・・そんなの普通の人は気づきませんよ。』

まあ、一応修正範囲内ですけど・・・』

伊達に欠陥品並みの機体を乗り回していたシンクではない。

めんどくさいといいながらもパターンをいつも訓練していたため細かい誤差にも気づくようになった。

しかし結局ほぼマニュアル操作のためパターンを使うことは少なかった

「とりあえず・・・修正してる間に囲まれちゃったんだが」

『あきらめてつかまりました。この世界では』

私達の武装はご法度のですから』

「・・・忘れてた・・・」

食べながら話を聞いていたため大分曖昧になっていてその状態ですっかりと忘れて出てきてしまったのであった

「もしかして・・・シンクさんですか？」

「ハイ・・・すみません・・・スクランブルがなると反射的に体が動いてしまって・・・」

ゲシュペンスト・アームズを格納庫に仕舞い地面に降りる。

すると体中に色とりどりの布や鎖で巻かれて芋虫上にされてしまった

「・・・何これ？」

「バインドです。質量武器使用の容疑で逮捕します」

ずるずると引きづられて機動六課に連れ戻された。

終始引きづられたためお尻が痛い

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6246t/>

魔法少女リリカルなのは strikers 超闘士を操る男

2011年10月9日04時30分発行